

| | | | |
|---------|---------------------------------|---------|---------------|
| 氏名 | フナ 船 | オカ 岡 | ミホコ 美穂子 |
| 学位の種類 | 博士（美術） | | |
| 学位記番号 | 博美第274号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成22年3月25日 | | |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉シャルダン研究－18世紀フランス絵画における自然と真実 | | |
| 論文等審査委員 | | | |
| （主査） | 東京芸術大学 | 准教授 | （美術学部） 田辺 幹之助 |
| （副査） | 〃 | 教授 | （ 〃 ） 越川 倫明 |
| （ 〃 ） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 松尾 大 |
| （ 〃 ） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 薩摩 雅登 |

（論文内容の要旨）

18世紀フランスのパリで活動したジャン＝シメオン・シャルダン（Jean-Siméon Chardin, 1699-1779）は、静物画と風俗画を制作した画家であった。彼の作品は、主として当時は低次とみなされた画題、市民の日常風景や、身の回りの品々を描いたにも拘わらず、自然模倣に徹する姿勢と色彩・筆致の技法によって賞賛を集めた。19世紀以降になるとこの賞賛は、近代絵画の発展に寄与したとする評価に受け継がれた。

研究史では、1983年のローザンベールによるカタログ・レゾネの編纂ののち、風俗画については、17世紀ネーデルラント絵画に図像源泉が求められるとともに、同時代の道德観念との結びつきが論じられた。だが一方、近代的とされる写実性や絵画技法については、18世紀の美術批評の引用に終始する傾向が強く、画家の異才を示すものとして漠然と解釈されてきた。特に、コシャンらが執筆した評伝が伝え、純粋な自然研究を行ったとする説は今日までほぼ無批判に継承され、その写実性の由来とされた。

こうした研究史を踏まえて、本論は、シャルダンの作品が、既存の図像に基づきつつも、いかにして先行作品に勝る評価を得るような造形を生み出したのか明らかにしようと試みる。すなわち、当時の美術批評の批判的解読、基礎研究を支えてきた一次史料の再検討、作品の造形分析、作品受容者との関係の検証を通じて、従来「真実」と形容されてきた写実性、「独特の」絵画技法がいかなるものであったのか解明することを目指すものである。

第一章では、研究史の流れを概観するとともに、本論に関連する主要な特殊研究をまとめ、上記の問題提起を行うに至る過程を記述した。

第二章は、初期の画業形成を考察の中心に据え、未習熟さが指摘される一方で若くして既に様式が完成していたとする、先行研究の二律背反する解釈の統合を目指した。まず、基準作を中心に、同時代作品からの直接的な引用を指摘することによって、今日まで信奉されてきた自然模倣神話の再考を行った。次に、造形分析を通じて、作品に観察される未習熟にも見える特徴こそが、様式生成の核になった可能性を指摘した。

第三章は、これまで図像研究に偏る傾向にあった先行研究を補うべく、風俗画作品の人物像表現を中心に造形分析を進めた。シャルダンは、あらゆる風俗画主題に対して、特定の人物像タイプ－幾何学的なまでに簡潔な形体へと還元した人物像－を共通して適用したことが明らかとなった。それは、当時批評家たちの間で「naïveté」という形容がなされた、ドメニキーノ、プッサン、ル・シュウールらの様式と近親性を持っていた。すなわち、17世紀の歴史画伝統への回帰が求められる中、シャルダンの風俗画が新たな視点から評価されたと考えられる。シャルダンは、既存の図像を摂取しつつも、それとは一線

を画する高貴な歴史画を想起させる造形を導入することによって、新たな風俗画を創造したのである。

第四章では、後期静物画作品をしばしば評価する同時代の形容「自然」や「真実」が具体的にいかなるものを指していたのか、明らかにしようと試みた。まず、風俗画の特徴であった簡素な形態表現が、後期作品へと継承されたことを指摘した。一方、18世紀後半の美術界では、ロココ絵画批判が急速におこり、コシャンやディドロといった論客たちが自然模倣論を展開した。そこで「自然」、「真実」といった言葉で語られた写実性とは、画家が卓越した眼で見た自然を、色彩や筆触による固有の技法「le faire」を用いて表現したものを指していたと考えられる。また、作品の所蔵者に関して言えば、芸術家や地方貴族が所有した傾向が浮かび上がる。すなわち、王侯の注文制作に熱心に応じる方向性よりも、シャルダンの制作は、「自分の楽しみのため」つまり自己の造形志向と、先進的な美術理論を展開する芸術家・批評家たちに刺激を受けて、推し進められたのである。

第五章では、19世紀中葉以降に起こったシャルダンの再評価について、18世紀における受容・評価との比較考察を行った。19世紀の再評価は当時の写実主義が背景となり、中産階級の画家シャルダンが、身近な環境を記録するかのよう描いたものとして評価される傾向が判明した。このシャルダン観は、18世紀のそれとは異なるものの、この画家の自然模倣伝説強化の一助となったことが明らかとなった。

以上、本論では、まず造形分析によって、シャルダンの作品には画業を通じて通底する造形原理があることを明らかにした。すなわち、落ち着いた色調、簡潔な構図、省略的な描法である。これらの造形はしかし、眼前の自然を迫真的に写生した結果であることを意味しない。事実、制作方法の検証からも判明したように、一次史料の記述と先行研究が主張してきた自然模倣説に反して、必ずしも実物の観察に基づいてはいなかった。そこで、技倆に秀でた画家ではなかったという制約、また中産階級の蒐集家に向けた制作であったことに新たに着目し、これらが様式生成の発端であったことを指摘した。次に、作品と批評の具体的な分析を通じて、シャルダンが18世紀中葉以降のロココ絵画批判・17世紀への伝統回帰の論調に歩を合わせたことによって、図像源泉であるネーデルラント絵画とは異質な風俗画を生み出した点を論じた。さらに、この美術界の変革には自然模倣への評価が関連し、同時代の観者が渋く落ち着いた色調、簡素な形態表現、緩やかな筆致といった造形自体に、自然の真実を見出したことを指摘した。上記のような発展を辿ったシャルダンの造形は、同時代の自然模倣論に適ったものであった。すなわち、純粋な自然研究を強調する画家伝は、まさにこの価値観を通して執筆された結論づけられた。この革新的な造形と自然認識が、19世紀以降の近代絵画につながる新たな地平を開いたと言えるだろう。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、18世紀のパリで活動した画家ジャン＝シメオン・シャルダンに関する再評価を試みるものである。シャルダンは、歴史画をもって上位のジャンルとする18世紀にあって、静物画と風俗画を手がけていたにも拘らず、自然主義的な様式と色彩・筆致の技法によって当時から高く評価され、さらに19世紀以降になると近代絵画の出発点に位置づけられる画家としての名声を博した。本論文は、こうした従来のシャルダン像を踏まえながら、18世紀から19世紀に至る批評の系譜を体系的かつ批判的に解説するとともに、作品自体の造形分析によって、新たな評価を試みるものである。

論文は5つの章から構成される。第1章はシャルダン作品の研究史を概観することによって問題の所在を明らかにすることに費やされている。シャルダン研究史の中でも画期的な意味をもつのは1983年のローザンベールによるカタログ・レゾネの編集であるが、それ以降の研究の主たる成果を申請者は、次のように纏めている。(1)風俗画の図像源泉は17世紀ネーデルラント絵画に求められる。(2)しかし、近代的とされる写実性や絵画技法は、18世紀に執筆されたコシャンの評伝に従って、純粋な自然研究の結果とされる。(3)近年では、主として英米の研究者たちにより、シャルダンの絵画技法に当時の視覚心理学の反映を見る新たな方法論が提示されている。(4)しかし、造形的な研究は、限られたものにすぎない。

そして申請者は、こうした研究史を踏まえて、とりわけ、図像源泉がネーデルラントの絵画に求められるにも拘わらず、シャルダンの絵画がひたすら自然研究によっていると評価されてきた、という矛盾に着目し、この矛盾の中にシャルダンの特質を認めるべく、関連する作例とシャルダン作品を比較しながら、的確な造形分析を行う一方、シャルダンを評価する「自然模倣」や「素朴さ」といった用語を批判的に吟味する。申請者のこの問題設定は、従来の研究史を正当に継承しながらも、独自の検討を加えようとするもので、説得力に富んでいる。

このような問題提議を踏まえ、申請者は第2章で、シャルダンの画業形成期に関する考察を行う。シャルダンの初期静物画について従来の研究では、自然模倣によりつつも事物の空間的な位置の描写などでは技法的な未習熟さが明らかである、と指摘される一方で、シャルダン様式が既にはっきりと現れている、という矛盾した見方が行われてきた。これに対して申請者は、まず、同時代の作品とシャルダンの初期の静物画との比較を通じて、シャルダンの作品が多くモチーフを他の作品から引用している、すなわち、純粋な自然模倣だけをそこに見ることは適切ではないことを明らかにする。そして、未習熟さとして指摘される造形的特質こそが、単に技法的な能力の欠如を露呈するものではなく、意図的な省略によるその後の様式形成の核心部をなしているのではないかと解釈する。

第3章では、初期作品に対する上記の考察に従って、風俗画作品に対して、図像源泉として指摘されてきたネーデルラント絵画との比較を通じ、シャルダン作品の造形的特質に関する考察を行う。すなわちシャルダンの風俗画では、画題や構図がネーデルラント絵画を踏まえているにせよ、人物像については、幾何学的なまでに簡潔な形態に人物像を還元する造形が顕著な点を明らかにした。そして申請者は、こうした造形が、ドメニキーノやブサン、ル・シュウールと言った当時の批評家たちの間で高く評価された画家たちの宗教画や歴史画と、まさに「素朴さ」という点で共通性をもつとする。そしてシャルダンが、こうした造形的特質によって風俗画に、ネーデルラントの卑近な風俗画とは対照的な、歴史画にも匹敵する高貴な質を付与したことを強調した。因みに申請者はシャルダン風俗画のこの造形的特質を、「フランス性」と評している。

第4章は、第3章の風俗画の造形分析を前提として、「自然」や「真実」という概念を通じて高く評価された後期の静物画を考察する。まず申請者は、風俗画に観察された簡潔な形態への還元が静物画にも観察されることを明らかにし、このような造形が、当時の技巧的なロココ絵画に対する批判と結びついて高く評価された可能性を指摘した。シャルダンの自然模倣的な姿勢は、コシャンやディドロといった批評家が反ロココ的造形の新たな評価軸として提唱した「もうひとつの自然」や「真実」といった概念を踏まえたもの、画家自らの目で見た自然を色彩や筆触による固有の技法をもって表した結果であり、単なる自然模倣ではない、という。すなわち、シャルダンの静物画に指摘される「自然さ」は直截な自然研究を意味するのではなく、むしろ当時の美術批評の動向に即した造形上の意図的な「素朴さ」の帰結である、と解釈される。そしてさらに申請者は、作品の受容者に目を向け、後期作品が王侯貴族の注文よりもむしろ、芸術家仲間や地方貴族に所蔵される傾向があることを示し、このような後期の静物画の造形が、当時の先進的な美術批評に即したものであると推論する。

最後の第5章では、シャルダンの造形に対して19世紀後半に行われた再評価と18世紀の受容・評価を比較し、その美術史的な意味を考察することが試みられている。そこで申請者は、ゴングール兄弟のような美術批評家による19世紀後半のシャルダン評価が、中産階級の身近な題材を取り上げたことに向けられている点を明らかにし、18世紀の自然模倣論が19世紀のボンヴァンやマネを介した写実主義の中で再解釈される中で、シャルダンの自然研究に対する神話が強化されていったことを指摘している。

2章から4章にわたる本論文の考察は、先行研究を消化した上で、第一次資料の批判的解読と造形分析を相補的に適用した正当な方法論に基づくものであり、明解に整理されている。その考察は従来の研究で自然模倣や写実、という曖昧な言葉によって語られてきたシャルダン研究の矛盾点を指摘し、この画家の造形の特質を、18世紀フランス美術と美術批評をめぐる歴史的な状況の中でみごとに浮き彫りに

したという点で、高く評価されよう。さらに19世紀以降のフランス美術の動向をも踏まえてシャルダンを位置づけようとする試みには、作家の個別研究に留まらず美術史全般の流れの中でシャルダン像を確かめようとする、申請者の幅広い視点がうかがわれる。ただし、上記のようなシャルダンの造形特質を「フランス性」とする点、つまりフランス美術のひとつの恒常的な特質の発露と結論付けるためには、15世紀以降の西洋美術史の、さらに広範な文脈からの分析が必要であろう。また5章に関して言えば、19世紀後半の画家の造形的特質や批評家の論理形成について、さらに個別的な考察を行う必要がある。しかしこれは、本論文のテーマには収まりきれない側面である。これらの批判点については、申請者の積極的な意欲の現われと評価し、今後の研究の展開に期待したい。なお本論文には付録として18世紀のマリエットやコシヤンの原典資料翻訳とシャルダンの静物画のカタログ・レゾネが付けられており、資料的な意味でもシャルダン研究に対して寄与するところ大である。

以上の観点から、本論文はシャルダン研究史の中で不明瞭なままに残されていた点に明解な帰結を与えるに足る説得力をもつものであり、したがって博士論文に相応しい論考としての要件を満たすものと判断される。